View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

Family System Test における階層性の検討

築　地　典　絵　　広　瀬　雄　彦
（本学非常勤講師）　　（教育学科）

1．はじめに

家族や個人を取り巻く人間関係をとらえる技法の一つに，シンボル配置技法がある。この技法は，与えられた空間に家族関係やそれを取り巻く人間関係を投影させ，被検査者の対人認知を把握しようとするものである（築地，2006）。観察法や描画法，質問紙法によって家族関係を把握する査定法とは異なり，家族全体という上位システムとその構成要素である下位システムとを同時に査定することができ，またその査定結果を数量化できるという点においても優れた査定法であるといわれている。

そのような特性をもったシンボル配置技法の一種である Family System Test（以下 FAST）は，Gehring（1985）により開発された家族査定法で，チェスのボードに類似した盤上に家族に見立てた木製の人形を配置することにより，被検査者の家族認知を表現させようとするものである。また人形の下にブロックを重ねることにより，人形の高さに変化がつけられるようになっている。

FAST では人形間の距離は親密さを表し，人形の高さは階層性を表すとされている。親密さは家族メンバー間の結びつきあるいは愛情を表すとし，階層性は権威，優位性，決定力，影響力であると定義されている。被検査者は人形とブロックを用いて，自分の家族関係を表現するように求められる。そして，その結果は①人形間の距離による親密さの程度，②人形の高さによる階層性の程度の２つの指標によって表現される。さらに，親密さと階層性の２次元を組み合わせたものに基づき，家族構造を「バランス型」「中間型」「アンバランス型」の３つのタイプに分類できる。

これまで，我が国においても FAST の査定法としての妥当性研究や臨床場面での適用が検討されてきた。前者のタイプの研究としては，主として日本人大学生を用いた研究が行われてきた。例えば，池田（2001）は，日本人大学生に FAST を実施し，家族の親密さと階層性がともに低く，Gehring の基準ではアブノーマルな家族関係と診断される「アンバランス型」に分類される家族が27％にのぼることを明らかにした。

また，中見（1999）や河野（2005）の日本人大学生を対象にした研究においても，日本では階層性の世代間境界が曖昧で「アンバランス型」が多くなるという結果を得ている。さらに，中見・桂田（2007）も大学生を対象に FAST を実施し，Gehring の評価基準を検討したところ，日本では階層性が表出しにくいのではないかと考察し，「凝集性が高ければ，階層性が低くても家族の健康度に問題がないのではないか」と述べている。同様の指摘として，同じシンボル配置技法の一つである Doll Location Test を開発した八田が，「わが国では人間関係の理解において階層性をそれほど重要視していない」（八田，1997）と述べている。

築地（2001）も，FAST と家族機能を測定する質問紙 FACES Ⅲ との相関を検討し，FAST の凝集性と FACES Ⅲの凝集性・適応性との間には相関が見られたが，FAST の階層性と FACES Ⅲの間には相関が見られないことを明らかにした。これらの研究から，FAST の凝集性の指標は日本においても適用に問題は

ないが，階層性の指標に関しては再検討が必要であるといえる。

そこで本研究では，先行研究の中から階層性の指標に関わる部分を抽出し再検討する。日本の家族関係について FAST を用いて査定する場合，Gehring の評価基準に基づく階層性は重要な指標となりえるかを検討するとともに，人形の高さという表現を家族関係の評価に有効に反映させるためには，どのような工夫が必要なのかもあわせて検討する。

2．臨床場面における FAST の階層性

FAST の妥当性研究や人形間の距離や高さを計量的に扱った研究に比べると，家族療法や心理面接で FAST を用いた研究は数が少ない。心理面接に FAST を介在させることにより，セラピストは家族関係を視覚的にとらえ，家族関係がどのようなものであるかを明確にとらえることができ，クライエントがどのような家族関係を望んでいるのかも理解することができる。一方，クライエントは，自己の表現が視覚的にフィードバックされることや，家族に対しての様々な内省にもつながる（中本・平林・村手・林，2006）といった利点が挙げられている。

ここではまず，心理面接の中で FAST が用いられた研究を取り上げ，クライエントが人形の高さをどのような意味合いで使用しているのかを，クライエントの語りと分析結果から検討したい。

相谷（2001a）は，FAST が家庭裁判所の少年事件における調査にどのように利用できるのかを検討した研究の中で，非行少年数人の事例を紹介している。薬物依存の父親をもち，自身も非行で少年院に送致された少年（面接当時16歳）の表現では，非行時場面，理想場面，葛藤場面の３つの場面で，一貫して父親の人形の高さが「４」（ブロック４つ分）と非常に高く表現されていた。相谷（2001a）は「父親の力の強さや影響力をどのような場面においても，大きなものと少年は認識しており，少年や家族の力では問題解決不可能との考え方が一段と強まる」と解釈している。また，アルコール依存の母親をもつ少年（面接当時14歳）の表現においても，非行時場面と葛藤場面において母親の人形の高さが「４」と表現されており，この高さに対して少年自身が「（母親には）だれも逆らうことができないから」「酒を飲んで当たり散らす（母親の）様子」を表したと述べている。これらの表現は極端な階層性に当てはまり，相谷（2001a）は非行の特性（薬物依存など）による特徴的な家族システムの存在の可能性が示唆され，少年の問題行動を顕在化することができたと述べている。

虐待を受けた子どもたちに FAST を実施した築地（2007）は，虐待を受けた子どもたちがブロックで慎重に人形の高さに変化をつけ，家族や対人間における力関係に敏感に反応していたことを報告している。児童期に実父と継母から身体的虐待を受けた少年（面接当時18歳）は，心理面接の中で虐待されていた時期を振り返り，暴力をふるっていた父親と継母の人形を高くし，それに対して「両親の圧倒的な力」を表したと述べた。その後，家族関係が落ち着き，少年自身も成長した現在の様子を FAST で表現するよう求めたところ，虐待していた両親よりも自分の人形を高く配置した。少年は自分の人形を高くしながら「今は就労し，お金を稼ぐという意味で立場が違ってきた」と述べた。

石田（2006）は摂食障害を呈した20代の女性とその家族メンバー（父・母・兄）に FAST を実施している。女性とその母親は，「父親よりも兄の影響力の方が大きい」とし，兄の人形を高く置いたが，兄と父親は「階層性逆転はない」と表現した。各メンバーで階層性に関する認識がずれる中，人形の高さについて「家族の葛藤状況を仕切る」「夫婦喧嘩やもめごとを仲裁する」といった意味合いで人形の高さに差をつけていることが明らかになった。

同じく摂食障害患者に FAST を実施した中本ら（2006）の研究では，摂食障害を呈する女性（26歳）が，同居の祖父母の人形の高さを「３」，母親を「２」，父親と自分と妹を「０」と配置した。祖母の人形に対して，「いつも家の中を把握したがり，高い視線で全体が見える

ところにいたがる」と語っていた。また，同じ症状を呈する女性（24歳）は，父親を「２」，母親を「１」，自分と妹を「０」と配置し，「父親の支配から逃れたい」という内容を語った。

Gehring（1993）も心理面接の中でFASTを実施し，その内容を紹介している。嘔吐や不眠の症状を呈している少女（８歳）の家族は，両親が不仲で離婚調停中であった。少女の保護者を両親のどちらにするのかを決定するために行われた心理面接の中で，少女は両親と祖父母の人形をすべて「３」，自分の人形の高さを「４」と配置した。自分の人形の高さについて「自分にもっと力があったら，両親のけんかを止められるのに」と述べていた。また，儀式的に手を洗うという強迫的行為を持つ少年（９歳）が，両親の人形を「２」，自分の人形を「３」と配置しながら，「（自分の症状のおかげで）自分が注目され，影響力を持つようになった」と話した。

これらの面接から，FASTの人形の高さが腕力，経済力，支配性，注目度，尊敬などを表していることが示された。また，家族に問題を抱え，症状を呈しているクライエントにとって，FASTの高さが非常に有効な表現手段になっていることも示された。

３．上位・下位システムと指標との関連

家族はいくつかの下位システムによって構成されているという視点に立てば，家族の下位システムは基本的に同じ世代で構成されているタイプと，異世代が混在しているタイプがある。前者は，親同士や子ども同士というカテゴリーで分類されるシステムであり，後者は例えば母と娘，父と息子などの性別によってカテゴライズされたシステムに代表される。家族の上位システムと下位システムといったシステムの種類と指標との関係を整理すると以下のようになる。

Gehring and Marti（1993）は，家族構造の記述に際し，cohesionとhierarchyの二次元を定義しながら，cohesionはemotional closenessにより決定されると説明している。一方，hierarchyは，Gehring and Marti（1993）によると，dominanceやinfluenceに関連づけられるとしているが，Feldman and Gehring（1988）の論文においては，powerという用語が使用されている。一般的には，家族内の階層性に関する研究の多くではpowerという用語が用いられている（Bowerman & Bahr，1973; Kranichfeld，1987）。

築地（2006）は上記のような用語の差異を考慮した上で，家族システムの例と概念との関係を図式化した（Figure 1，Figure 2）。たとえば父と母，母と子といった二者間の情緒的なつながりは親密さと表現されるのが適当であると考える。その最も小さいシステムである二者関係が集結することによって，上位システムである家族全体のまとまりとなる。集団となった場合，その形態は，結合，粘着，結束，凝集（力）であり，「集団のメンバーを集団内に留まらせようとするもの」，「メンバーをその集団に留まらせようと作用する諸力の総体」という意味合いを帯びる。Figure 1に示したように，家族

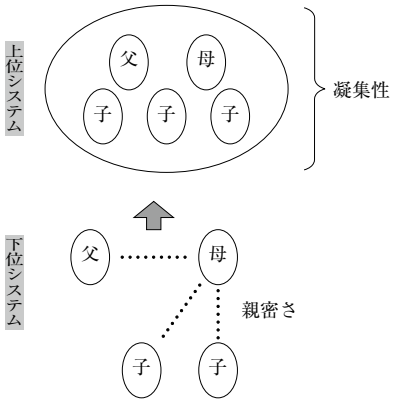

Figure 1　家族システムと親密さの指標（築地，2006）

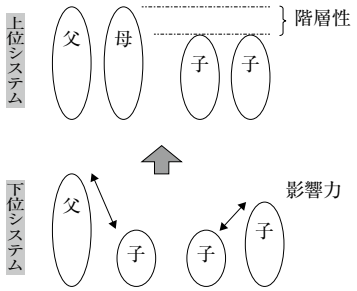

Figure 2　家族システムと階層性の指標（築地，2006）

メンバー全体のまとまりとして家族を評価する場合，それは凝集性となる。

家族内の権威や影響力といった概念も，下位システム内の個人の影響力の程度の差が上位システム内の階層性を構成すると考えられる（Figure 2）。

したがって，これらの概念の記載について，まず親子間や夫婦間などの下位システム内の情緒的なつながりを親密さと記述し，個人の力関係を表現する際には影響力と記述する。また家族全体としての親密さを凝集性，家族内の主として親世代と子世代の影響力の層を階層性と記述することが適切であると考える。先行研究では，階層性，階層差，力関係，影響力といった複数の表記がなされており，特に上位システムにおける階層性と下位システムにおける影響力を，ともに階層性と記述することが多く，結果の読み取りを複雑にしていた経緯がある。そのために家族システムを分析する際には用語の統一を図るべきである。

また，Gehring（1993）は問題のない家族は両親間が親子間よりも親密であり，親は子どもよりも強い影響力を持っており，家族内の世代間境界が明確な構造を持つとしている。他方，問題を持つ家族の特徴として，親子間に両親間よりも高い親密さが見られ（世代間結合），階層性においても親子間に差がない場合（世代間平等）や極端に階層的な場合，子どもの影響力が親よりも高い場合（階層性逆転）を挙げ，これらを世代間境界が不明確な構造であるとしている。このようなアブノーマルとされる家族構造と上位・下位システムとの関連を整理し，記述の単純化と一貫性を図る必要がある。

例えば，下位システムの中で兄の人形が父の人形よりも高く配置された場合には，「父と兄の間に影響力の逆転を生じている」と記述する。上位システムの中で子世代が親世代の影響力を上回るような場合には階層性逆転と記述する（Figure 3）。同じように，世代間平等の構造も上位システムにおいては階層性平等と記述し，下位システムにおいては影響力平等と記述する（Figure 4）。

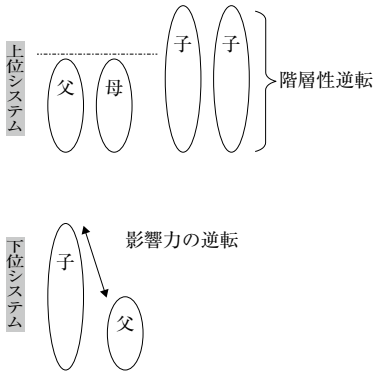

Figure 3　階層性逆転と影響力の逆転

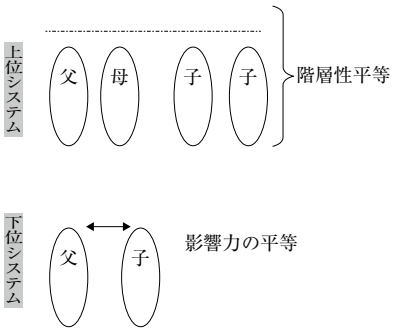

Figure 4　階層性平等と影響力の平等

4．家族構造タイプに関する検討

FAST では凝集性と階層性の二つの指標の組み合わせから，被検査者の家族関係認知を 3 つの家族構造タイプに分類できるとしている。具体的に見ていくと，家族の凝集性高，中かつ階層性中の場合は「バランス型」と呼ぶ。凝集性中かつ階層性小，大，凝集性低かつ階層性中を「中間型」と呼び，それ以外を「アンバランス型」と呼んでいる。欧米の研究では被検査者の示す家族構造は「バランス型」，「中間型」，「アンバランス型」の順に多く，「バランス型」が全体の約70％を占めるとしている。

日本では，池田（2001）が大学生を対象に FAST を実施し，上記の基準で家族構造を分類したところ，「バランス型」34％，「中間型」38％，「アンバランス型」28％であった。築地（2000）の女子学生を対象にした FAST の研究結果においても，「バランス型」30％，「中間型」42％，「アンバランス型」28％であり，い

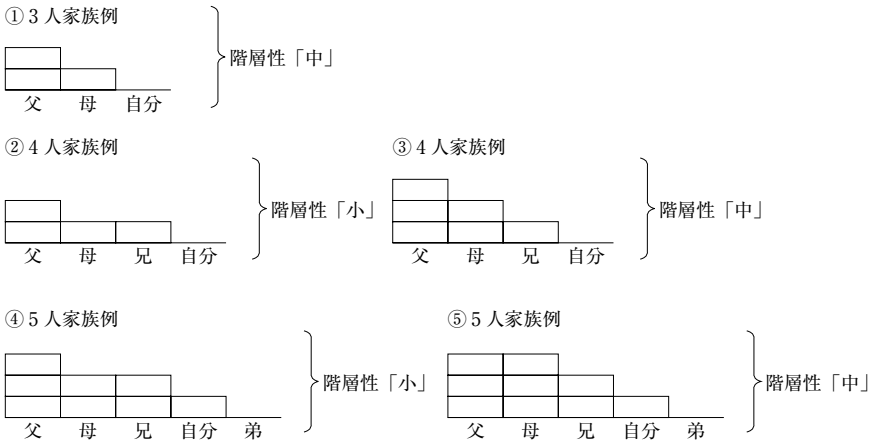

Figure 5　階層性の評価の例

ずれの結果も欧米の研究とは異なっていた。このような相違は，欧米に比べて日本の青年の表現した家族関係の方が，階層性小に該当する割合が多かったことに起因する。さらに池田（2001）は，両親間の高さの分析から，被検査者の７割以上において父親の方が母親よりも高く表現されていたと述べ，日本の家族の特徴がFASTによって明らかになったと考察している。

Gehringの評価方法によると，バランス型の条件である階層性中に当てはまる家族構造は次のようなものである。すなわち，両親の人形と子どもの人形の差を階層性とし，両親の人形のうちの低い方のブロックの数から子どもの人形のうちの高い方のブロックの数を引き，この差がブロック３つ以上なら階層性大，ブロック２つないし１つなら階層性中，差がない場合もしくはマイナスの場合を階層性小としている。

これまでの研究では，階層性大に該当する被検査者は非常に少ない点を念頭に置き，３人家族を想定してみると，父親「２」，母親「１」，自分「０」のブロックを積んだ場合，階層性は中に該当する（Figure５の①）。４人家族になると，父親「２」，母親「１」，兄「１」，自分「０」のブロックを積んだ場合，階層性は小に該当する（Figure５の②）が，例えば父親「３」，母親「２」，兄「１」，自分「０」と配置すれば，階層性中に該当する（Figure５の③）。５人家族の場合は，父親「３」，母親「２」，兄「２」，自分「１」，弟「０」という配置であれば階層性小に該当する（Figure５の④）が，父親「３」，母親「３」，兄「２」，自分「１」，弟「０」のブロックを積んだ場合，階層性は中に該当する（Figure５の⑤）。

問題のある家族構造をこの家族構造タイプに照らし合わせると，Figure５の②④は階層性平等に当てはまる。しかし，②④の表現では父と兄の間には高さの差があり，自分と両親，弟と両親の間にも高さの差が表現されている点を考えれば，親と子の世代間には階層が明確に表現されているともいえる。また，日本では母親よりも父親の方の影響力が大きいとされる池田（2001）の研究結果をふまえれば，両親間にブロックの差をつけた場合，きょうだいの人数が多ければ多いほど，親子間でブロックに差をつけることが制限されるといった点も考慮しなければならない。Gehrigの家族構造タイプの評価方法で日本の家族の階層性を評価すれば，アブノーマルな家族であるかのような印象を抱かせてしまいがちだが，下位システムを具体的に考えてみるとこのような問題点が明確になる。

５．考　察

５．１　階層性の指標の意義

心理面接でFASTを用いることにより，クライエントは人形の高さによって，腕力，経済力，支配性，注目度，尊敬など，さまざまな家

族表現を行っていた。非行や虐待，摂食障害などの問題を抱えている場合，家族関係の階層性を表現することによって，より豊かに家族認知をとらえることができたことは明らかである。階層性の指標は少なくとも心理面接において個人の家族認知をとらえる際には，非常に有効な指標となることは間違いないであろう。

相谷（2001b）は非行の種類によって家族構造が異なっているのかを FAST を用いて検討している。少年鑑別所に拘束されている非行少年を凶悪非行群と薬物非行群の２群に分け，非行時場面，理想場面，葛藤場面の３つの場面を想起して，家族関係を表現させている。それによると凶悪非行群では，いずれの場面においても少年と親との間に高さの差が見られなかった。強盗や窃盗を惹起する少年は家族であっても独立した個人との考え方が固着化しつつあり，少年自身の存在を誇示するには，結果的に家族各人の独立を認めるしかなく，階層性自体を否定することになってしまうと相谷（2001b）は解釈している。一方薬物非行群では，非行時場面と葛藤場面において父親の高さが著しく高くなっていた。この結果は，家族内に何らかの問題が生じた場合に，父親の影響力が少年や母親に強く及ぼされ，その影響自体は決して性質のよいものではないと分析されている。また，薬物非行群では理想場面になると父親の高さが低くなり，影響力が小さくなるという結果も得ている。そしてこの結果を薬物非行群の少年は，いまだに父親に対して何らかの期待感があると考察している（相谷，2001b）。

また，人形を用いたシンボル配置技法の一種である Doll Location Test を用い，非行少年の人間関係を調査した中村（2011）によると，非行少年の孤独感と人形の高さとの間に負の相関が見られ，人形の高さが低いほど家族関係における孤独感が高いという結果が得られた。非行少年らが述べたところによると，「尊敬や大事な存在，特別な存在」に対して高さを用いることが多かったことが報告されている。

このように被検査者の抱える問題と階層性との間には関わりがあり，計量的分析によってもその関連は明らかになる。しかし，被検査者の自発的な語りやインタビューから，人形の高さの意味にはさまざまなバリエーションがあり，その使われ方は個人差が大きいと考えられる。そのために妥当性研究や発達的研究においては，FAST の階層性の指標が凝集性に比べてはっきりとした結論が得られないという結果を招いていると考えられる。

５．２　指標と家族構造タイプについての見解

本論文では，FAST の結果の読み取りをスムーズに行うために，指標に関する記述の統一を提唱した。開発者の Gehring（1993）が「家族関係構造の理解は，家族とその下位システムの記述から始めなければならない」と唱えているように，下位システムにどのような関係が表れているのかを理解することが，まず優先されるべきだと思われる。下位システムの集まりが上位システムである以上，この２つのシステムの混同は，全体理解の混乱を招く。影響力平等や階層性平等といった用語の差異を明確にすることでこれらの混同は避けられると考える。

また，家族構造タイプについては，その算出方法に問題があることを指摘した。そして一つの試みとして，次のような Gehring とは異なる算出方法を提案する。それは，親世代と子世代の間の階層性を明確にするために，両親の人形の高さの平均と子世代の人形の高さの平均を算出し，その両者の平均の差を大，中，小に振り分けるという方法である。例えば，父親「３」，母親「２」，兄「２」，自分「１」の家族では，親世代の平均が2.5，子世代の平均が1.5となり，その差は１である。差が３以上の場合は階層性大，０より大きく３未満の場合は階層性中，０またはマイナスの場合が階層性小とする。

この算出方法で築地（2000）の女子大生のデータを分析しなおすと，階層性大が２％，階層性中が86％，階層性小が12％となり，欧米の結果と類似したものとなる。この下位システム内の平均値をとる算出方法の適否については今後の研究で精査する必要がある。

5．3　今後の課題

Gehring（1993）は「FAST は研究と治療の両分野で使用できるように，家族システム理論に基づき経済的かつ応用性を備えた装置として開発されたもの」であるとしている。本論文の２では心理面接の中で FAST を用い，階層性の指標から被検査者の家族認知が明らかになり，心理面接に有効に働いた事例を紹介した。

同種の家族査定法である家族イメージ法を開発した亀口は，家族療法の中でこれを活用している。査定法の実施に関して，「個別よりもむしろ家族同席で実施し，相互に結果を確認させるところに最大の特徴がある」とし，「とりわけ，家族臨床の初期段階では，家族面接を通じて何かを達成する上で簡便かつ有効な手段である」（亀口，2000）と述べている。

さらに，亀口（2004）は家族を病理の源と見なすのではなく，家族システムを円滑に動かす資源としてとらえ，家族メンバーが資源として積極的に問題解決に関わるような転換が望ましいとしている。しかし，その転換は容易ではなく，母原病論に代表されるような病理論の呪縛からの脱局は，被害者であるはずの母親自身にとっても難しいとされる。そこで，このような転換のために，家族イメージ法や FAST に代表される家族査定法が有効であると考えられる。

FAST を家族療法などの心理面接で活用した研究の数はまだ少ない。しかし，今後は心理面接における家族構造の変化をとらえるために FAST を用いることが有益となる可能性がある。そのためには，FAST による査定にとって重要な指標となる階層性を明確に定義しておく必要がある。

引用文献

相谷登（2001a）．家族システムと非行についての考察―Family System Test の活用―．家庭裁判所調査官研修所紀要，**71**，21－47.

相谷登（2001b）．第４ピークの少年非行―凶悪非行少年と薬物非行少年の家族理解―．八田武志編　シンボル配置技法の理論と実際．ナカニシヤ出版，pp. 131－147.

Bowerman, C. E., & Bahr, S. J.（1973）. Conjugal power and adolescent identification with parents. Sociometry, **36**, 366－377.

Feldman, S. S., & Gehring, T. M.（1988）. Changing perceptions of family cohesion and power across adolescence. Child Development, **59**, 1034－1045.

Gehring, T. M.（1985）. Socio-psycosomatic dysfunctions: A case study. Child Psychiatry and Human Development, **15**, 269－280.

Gehring, T. M.（1993）. *Familien System Test Manual*. German,: Belts Test. Gesellshaft 八田武志　訳　1997　FAST（Family System Test）マニュアル　ユニオンプレス.

Gehring, T. M., & Marti, D.（1993）. The Architecture of Family Structures: Toward a Spatial Concept Measuring Cohesion and Hierarchy. Family Process, **32**, 135－139.

八田武志（1997）．FAST（Family System Test）マニュアル．ユニオンプレス.

池田和夫（2001）．FAST による家族構造認知の異文化間比較．八田武志編　シンボル配置技法の理論と実際．ナカニシヤ出版，pp. 149－163.

石田ゆかり（2006）．Family System Test（FAST）を活用した家族研究の試み．家族心理学年報，**24**，160－171.

亀口憲治（2000）．家族臨床心理学―子どもの問題を家族で解決する―．東京大学出版会.

亀口憲治（2004）．家族力の根拠．ナカニシヤ出版.

河野望（2005）．Family System Test による家族関係の認知に関する発達的研究―小学生・中学生・大学生の比較から―．人間発達研究所紀要，**17**，34－53.

Kranichfeld, M. L.,（1987）. Rethinking Family Power. Journal of Family Issues, **8**, 42－56.

中見仁美（1999）．Family System Test（FAST）による日本の家族構造研究―大学生の親子間の親密さと力関係を通して―．臨床教育心理研究，**25**，83－92.

中見仁美・桂田恵美子（2007）．大学生における Family System Test（FAST）の評価基準の検討―面接の応答，精神的健康度の関連から―．家族心理学研究，**21**，20－30.

中本順子・平林由香・村手恵子・林吉夫（2006）.

FAST（Family System Test）にみられた摂食障害患者３例の家族関係の検討―FAST による日本人の家族関係についての予備的研究―．心身医学，**46**，146－152.

中村薫（2011）．非行少年の孤独感と DLT における人物表象配置の特徴．心理学研究，**82**，189－195.

築地典絵（1999）．Family System Test を用いた児童の家族関係の研究．カウンセリング研究，**32**，264－273.

築地典絵（2000）．Family System Test による青年期女子の家族関係構造の特徴．京都女子大学大学院文学研究科　教育学専攻博士課程完成記念論文集，pp. 205－221.

築地典絵（2001）．Family System Test の基礎的研究Ⅰ―FACES Ⅲおよび疎外感尺度との比較を通して―．カウンセリング研究，**34**，136－144.

築地典絵（2006）．家族関係構造をとらえる上での指標に関する検討．羽衣国際大学人間生活学部研究紀要，**1**，35－48.

築地典絵（2007）．シンボル配置技法による家族関係認知の研究―Doll Location Test と Family System Test―．風間書房.

NorieTSUKIJI，Takehiko HIROSE：Rethinking of hierarchy of Family System Test